Topics

Program for Nurturing Global Leaders in Tropical and Emerging Communicable Diseases
熱帯病・新興感染症制御
グローバルリーダー育成プログラム

前号にひきつづき、今年度から始まった長崎大学「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム」のレポート第二弾です。世界で活躍するリーダーを養成しようという文部科学省の「博士課程教育リーディングプログラム」は、日本の大学院改革の目玉的存在。全国の大学から申請された一二四件のなかから最終的に採択された二十四件は、各大学の特徴を活かした多彩なものばかり。熱帯病や感染症の分野でのグローバルリーダーや感染症制御専門家を育てるプログラムが採択された長崎大学では、大学院医歯薬学総合研究科が中心となって動き出しています。必要とされるグローバルリーダーの条件とは何か？ また、そこではどんな講義が行われているのか？ 担当の先生方やそこで学ぶ学生たちにお話を聞きました。

大学院プログラム

感染症研究の経験と実績が豊かな長崎大学で

大学院医歯薬学総合研究科
本間季里准教授

この長崎大学のプログラムの大きな特長の一つとして、学部横断的な教員団がカリキュラムを組んでいること。なかには外務省や世界保健機関（WHO）、国際協力機構（JICA）などでの勤務経験のある教員もチームに加わっています。まずは携わっている先生方にお聞きしてみましょう。

世界のリーダーを目指す！

予想通りのことと予想外のこと

大学院医歯薬学総合研究科
本間季里 准教授

このプログラムは、新しい試みなだけに前例や見本がありません。そこで、方向性を決めて講義全体を構築していく四人の先生方がいます。そのなかの一人、本間先生にお話を聞きました。

「私たちの役割は、講義のテーマやデザインを綿密な打ち合わせの下に決めていくことです。一年生では主に課題解決型授業。例えばプレゼンテーションの練習では、学生に与えるテーマも、いろいろな見方のできるものをわざと設定します。学生はそのテーマの重要な部分や問題点を理解し、人に説明できなければいけない。冗長（じょうちょう）にならないよう制限時間は厳守。ここで体得したスキルを磨くことで、答えが示されていない問題に対して短時間で答えを見つけ、多様な見方を理解する力が身に付きます。特に日本人の場合、大学までは一方的に座学でおぼえて正解を求める思考習慣があります。そこで、問題は何なのかを発見し、その解決方法を探る思考パターンにシフトする必要があります。四年後にリーダーとなるべく、素養を身に付けて修了するには、プレゼンやディスカッション、的確な質問ができる能力は必須。そのあと、二年生では三週間から三ヵ月間、国外のいろいろな機関や研究室で武者修行。また、危機管理や倫理学の講義で知識を深め、三、四年生では自分のテーマを決め、論文を書いて学位を取るという流れです」。

まず、基礎力をしっかりつけて海外研修をこなし、自分のテーマを見つけるハードな四年間なんですね。経済的支援があるから勉強に集中できます。

「私たちも初めての試みなので、学生の反応をみながら試行錯誤の繰り返しです。最初、発言するということに慣れてないため日本人の学生が静かでした。私たちは、彼らがこれまで受けてきた日本の英語教育に問題があるのではと考え、英語のプライベートレッスンを実施してみました。するとすぐに、積極的に発言するようになりモチベーションも向上し、学生同士で情報交換ができるようになりました。教員が少し工夫するだけで、学生の方がその意図を理解して実行する力を持っていた。嬉しい意味で予想を裏切ってくれて驚きました。これからが楽しみですね」。

WHO勤務の経験を活かしプロのリーダーを育成

熱帯医学研究所
Laothavorn Juntra 教授

熱帯医学研究所
Laothavorn Juntra 教授

チャントラ先生は、熱帯病や人材育成分野の治験コーディネーターとして、世界保健機関（WHO）で十四年間従事してきたキャリアを持っています。

「私はWHOで、主に臨床研究が行われる際の質の保証に携わりました。国際的な臨床試験実施基準や患者に対する倫理基準に則っているかどうか。また、研究倫理に関するグローバルネットワークの設立を支援したり、医薬品開発に関する管理業務などを流行国の疾病撲滅や制御プログラムに導入するなど、質の高い研究の支援に関わることができました。治験コーディネーターの仕事の範囲は幅広いので、広い視野が必要とされます。一方、WHOは一九二ヵ国で構成されている組織なので、政治的な一面もあります。研究者としてはいつも自由に考え、適切だと思う方向へ物事を動かすよう努力してきましたが、変革をもたらすには、利害関係者の協議や議論に時間を要することもあります。難しい問題ですね」。

そのあたりは現場での経験がなければ見えてこない部分かもしれません。

「はい。私の専門は医薬ワクチンの開発能力強化に関連することですが、リーディングプログラムでは専門的な知識や技術だけでなく、これまでの私の人生経験やネットワークを、学生と分かち合いながら創造性を育んでいきたいですね。その創造性からイノベーションにつなげたい。学生が国際機関で実習を体験する局面では、精神的な支えや進路指導を行うメンターなども担当しますが、さまざまな文化にも学生が順応できるよう手助けしていきたい。研究の分野

熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム		
	カリキュラム	◎1年次では基礎科目を分野横断的に学ぶ（ウイルス学特論など必修7科目、国際経済学特論など選択4科目、分子生物学実習） ◎2年次では応用科目として感染症制御に関する知識を習得（フィールド疫学特論など必修6科目） ◎4年間通して英語によるトレーニング「コミュニケーションスキル」実習 ◎海外研修は早期（1−3ヵ月）、後期（3−18ヵ月）を実施
	特徴	◎全カリキュラム完全英語化 ◎41名の教員団ほか第一線で活躍する専門家など産学官にわたる教育体制 ◎ケニア・ベトナムの長崎大学拠点ほか、WHO、「国境なき医師団」などの国際NGOと連携したon the jobトレーニング ◎学生の設定する研究分野にそったメンターを指名、キャリアパスを支援 ◎奨励金制度、海外研修経費支給制度を新設
	特記事項	◎学位記に「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム」修了を付記

で国際的に成功し認められるには原則があります。誠実であること。プロ意識を持つこと。説明責任を果たすこと。そして人々や地域社会に対する尊敬の念を持っていること。これらを守れるプロの研究者やリーダーが長崎大学から一人でも多く誕生するよう、力を尽くしていきます」。

通訳／フリッツ郁美さん（チャントラ先生秘書）、田中薫さん（リーディングプログラム支援室）

英語を共通言語として表現力を鍛えていく

言語教育研究センター
隈上麻衣 助教

コミュニケーションスキルクラスを受け持つ隈上先生の専門は、第二言語習得論。

「当初、ネイティブかどうかでクラスを分ける話もあったのですが、学生たちがいっしょの方が聞く耳も鍛えられるというので一つにしました。実際、国際学会ではクセのある英語が飛び交います。母語から影響された独特の文法的な誤りがある場合、さらには文法が正しくても聞き取れない場合もあります。例えば日本人は、「a」「the」など冠詞を落としやすい。それらを自覚してミスを少なくし、また、クセのある英語でも聞き取れるようになってほしい。この授業は、英語を共通言語にしてさまざまな場で適切に対応する力、きちんとした思考でライティングする力を養っていくのが目的です」。

英語がしゃべれるようになればいいだけじゃないんですね。

「はい、授業では種々のテーマで語り合いますが、国によって違いのあるものは特に活発な議論になります。『受験のシステムの違い』とか『SNSを使うのは良いか悪いか』。学生からは『愛かお金か』というテーマを提案されたこともありました。後期ではロールプレイング、例えばお医者さん役と患者さん役に分かれての診察の場面や、国際会議での質疑応答の場面などを設定して進めていきます。基礎科目の講義で身に付いた単語力を、自然に活かせるようになればと考えています」。

言語教育研究センター
隈上麻衣助教

プログラムの中身とは？講義をのぞいてみると…

「ウェルカム トゥ レイニーシーズン！」。梅雨入りした朝、そんな一言から始まったのが、リーディングプログラムの「コミュニケーションスキル」講義。教壇に立つのは言語教育センターの山下龍助教。オランダから日本に帰化された方だけに日本語も話せますが、ここではもちろん英語。いや、このプログラムのカリキュラムすべてが英語なのです。前期の学生は九名。なかにはアフリカやアジアからの留学生もいます。一年次で学ぶウイルス学などの基礎科目や二年次の感染症制御関連科目のほかに、四年間通して徹底的に鍛えられるのが、このコミュニケーションスキル。この日のテーマは「武士道とは？」。学生のレポートを題材に、「葉隠」「新渡戸稲造」といった言葉が飛び交い、話題は膨らんでいきます。授業後半は隈上先生にバトンタッチ。席を立ち、二列に向かい合って一対一の会話エクササイズ。「あなたの国の魅力は？」「毎日の食生活の特徴は？」相手を順に入れ替えて会話するうちに、無口だった学生も英語が口をついて出て、表情が豊かになっていきます。

また、熱帯医学研究所の皆川昇教授による「病害昆虫学特論」の授業では、病害動物学を題材にしたプレゼンテーションが行われました。グァテマラの病害虫やマラリアを引き起こす蚊に関する調査結果や考察など、事前に出されたテーマを自分なりにまとめ、パワーポイントを使いながら英語で発表します。発表後は先生の講評をはじめ、ほかの学生からの質問や意見が飛び交い、活発な討論が行われていました。

フィールド経験豊かな皆川先生（左）と、その講義の様子（上）。

Topics
Program for Nurturing Global Leaders in Tropical and Emerging Communicable Diseases
熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム

チームメイトは留学生 違いを理解し、世界へ

コミュニケーションスキルのクラスでは相手をどんどん替えながらスピードトーキング。

どんな学生ががんばっているのでしょう。日本人の今西望さんとウガンダから留学しているラッキー・アムザさんの二人にお聞きしました（ラッキーさんの通訳は今西さん）。今西さんは明治大学農学部で修士を取り、長崎大学で学んでいます。「専門は昆虫分類学、特に蚊が中心。それだけに医学や疫学を学びたくて長大に進学しようと思っていたら、このプログラムを知り応募しました。もちろんリーダー育成という重いプレッシャーはあります」。一方、ラッキーさんは医歯薬学総合研究科で、すでに二年間学んできました。「将来的には学んだ薬学を活かせる本国の研究所で働きたい。このプログラムはすべて英語で行われると聞いて、僕にはやりやすいかなと応募しました。しかし入ってみると、国が違えば英語のアクセントも違い、最初はとまどいました。アフリカンイングリッシュにクセがあるように、ベトナム、タイ、日本の英語もアクセントが違う。でも、だんだんと聞き取れるようになってきましたよ」とラッキーさん。今西さんも「とにかくしゃべらないといけない環境に放り込まれるのがありがたいです。クラスメイトとは、さまざまなテーマで議論もします。みんな国によって違う考え方や価値観を意識しながら、それでも相手を理解しようとしています。先日は日本人の先生に日本語で質問していたら、外国人のクラスメイトから『あなたはフェアじゃない、日本語のできない人間がいるときは英語で話すべきだ』とズバリと言われました。それはたぶん、国際感覚以前のエチケットのようなもの。ハッとしましたね」。ラッキーさんはプレゼンテーションが課題とか。「プレゼンで一番難しいのは、聞く側が異分野の人の場合、いかに僕の話を寝ないで（笑）集中して聞いてくれるか、正確に理解してくれるか。そのために話し方もシンプルに、わかりやすく工夫しないといけない。来年はもう少し上達したい」。今西さんも「プレゼンは私も苦手。というか、これまで日本の大学ではあまり学んでこなかった。アドバイスはすごく貴重です」。

二人とも、まだ四年後の明確なビジョンは定まっていないとか。しかし、二年次からは武者修行ともいうべき海外研修もスタートします。なんとか在学期間中に、自分の進むべき道やテーマをしっかりつかみたいと語ってくれました。

今年度始まったばかりのこのリーディングプログラムは、長崎大学にとっての新しいチャレンジなのです。

プログラムスタート時の最初のメンバーだけに、国籍は違っても、とても仲のいい学生たち。写真撮影でも全員集合。「でもいっしょに遊びに行ったことはないね」「やることが多すぎて毎日講義が終わるとバラバラになっちゃう」「今度企画しますか」「いいねぇ」。

少人数で リーダーの資質を 磨くシステム